青木は、知念に、嘉元の手紙をおしつけるやうにして渡すと、大急ぎで、家のうしろの小高い巖の上に登つて行つた。そこに立つと、廣い〳〵海が、眼のまへに見えるのである

青木はひろい海のはてに、皆(なじり)をそそいだ。水平線の上には、雲もなかつた。熱帶の海はぎら〳〵と光つてゐた。

『おうい』と、青木は、大きな聲で、海に叫んだ。

『おうい嘉元さん、十兵衛さん、かじゆさん、しつかりやつてお呉れよ、しつかりねェ。神風がジャルマから吹いて行くぜ!』

熱帶の海は、ぎらぎらと、輝いてゐた。

御歌たまはる日

昭和七年十一月十日　皇太后陛下に於かせられては、大宮御所にて取り行はれた、御歌會の席上にて、『癩患者を慰めて』といふ御題を以て、

つれづれの友となりても慰めよ

行くことかたきわれにかはりて

といふ御歌をお詠みになられたが、此の御歌は、翌十二月には、御歌所の入江子爵の手によりて謹書され、全日本の、官公私立の療養所に掲げられることになつた。ついで御歌は作曲されて、奉唱されることになつた。

『つれづれ』の御歌御下賜と共に、全日本の朝野に於ては、救癩事業に對する輿論が、俄然として捲起されて來たのであつたが、殊に、世の注目を引くに至つたのは、沖縄の癩問題であつた。そして昭和十年九月十三日には、東京基督教青年會館で、沖縄癩事情座談會が開かれたのであつた。沖縄救癩協會の同志たちは、服山牧師を東京に送つて、大いに訴へさせることにしたのであつた。座談會に集まつた者は、何れも、此の問題に關心を有する、各方面の代表的な人々であつた。

前内務大臣安達謙藏氏の顏も見えた。東京朝日新聞社の下村宏博士の顏も見えた。賀川豐彦、内務省癩豫防課長高野六郎博士、同技師草間弘司博士、癩豫防協會霜崎清、日本女醫會杉田鶴子、傳染病研究所高木悅麿博士、慰癩園和田秀豐氏、その他百名近くの出席者であつた。

座談會の席上で、いたく人々を感動せしめたものは、目下長島愛生園に入園してゐる、沖縄

縣出身の病者たちから送られた嘆願書であつた。

嘆願書の中には、斯うしたことが、書いてあつた。

御存知の通り沖縄は日本一の貧乏縣でありまして、諸般の施設につきましても、他府縣とはお話にならぬ貧弱なものであります。かゝる事情の下に置かれた沖縄の癩の猛威をふるふに至つたことも亦當然のことでせう。

私共は不幸にして、その犠牲となりましたが、愛生園を知り、早くして入園を許されたことは、不幸中の幸ひと思ひます。然るにかゝる幸福をつかみ得て、内地の療養所に入り得る者は、三千の病者中百數十名に過ぎません。大部分は喰ふに食なく、著るに衣なく、或は家深く蟄居し、或は家族より放逐せられて、海岸、洞窟、墓場に雨露をしのいでゐると云ふ狀態で、全く治療どころか、無理解の地方人の爲めに、我れ自ら、生命をちぢめる者も尠くありません。私共は療養所にあつて、毎日充分なる手當を受け、感謝のうちに暮してゐますが、故郷の病友の通信により、彼等の療養所入院を、一日千秋の思ひを以て、氣の毒な一日一日を送り迎へてゐる狀態を知らされまして、實に胸に釘うたるゝ思ひが致します。どうか皆様のお力添へによりまして、病友の救濟が、一日も早く行はれますやう、

それによつて沖縄縣が、一層明るくなる様に、御盡力お願ひ致します。云々

可憐なる嘆願書に次いで、人々に強く訴へたものは、服山牧師の話であつた。服山牧師は、名護を中心として、爰數年間、自分が直接に經驗したことに基いて、如何に沖縄に於ける癩者が、苦しい生活をして居るかを説明した。

『みなさん、沖縄の病者は、常にかう言つてをります。「十坪でも、一坪でも、土地が欲しい、そこに立つて居れば、誰も文句を云はぬといふ土地が欲しい、食料なんか普通の療養所の一人分で、五人位は食べてゆくことが出來る」と。これは、彼らの、眞實の聲です。昭和聖代の今日、我が沖縄には、奴隷が居るんです。否、奴隷以下です。奴隷はなほ食物を得るでせう、寢るべき土地が與へられるでせう。然るに今日、この日本に、奴隷以下の取扱をされる同胞兄弟が居るのです。

沖縄の人々は、唯、獸の如く彼らを追ふて、終にどうしようと言ふのでせうか。病者は行くべき所を知らずして、放浪より放浪にうつり、病菌は無限に沖縄の幼少年の中に撒かれるのです。急務は彼らに隔離すべき場所を與へることです。

あゝ彼らは、誰か負ふべき重荷を、自から背負ふた人々です。長れ多くも　光明皇后様が癩

者を、お洗ひになられた時、癩者は忽ち光を放ち、佛になつたと云ひますが、實に深い言葉であります。

我らが、彼らに、同情の手をあげる時、彼らは亦佛となるでありませう。神の聖光を放つでありませう。

それだのに——それだのに……沖縄の人々は、尚竹槍を以て追ひ、獸の如く、墓場に送らんとするのです。……』

こゝまで言ふと、服山牧師は、急に聲を呑んだ。それ以上、言葉をつゞけることが出來なかつた。熱湯のやうなものが、胸の底から、込みあげてくるのであつた。

可憐なる嘆願書と、服山牧師の血を吐くやうな訴とは、座談會の人々をいたく動かしたのみならず、遂に三井報恩會を動かして、九千五百圓の助成金を得るの途をも拓かしめたのであつた。

かうして御歌を賜つた日から沖縄の癩者のためにもやうやく救癩の手が差し伸べられようとし、青木たちの言語に絶する苦闘の生活の上にも明るい光が約束されたのであつた。然し、そ

の光明に達する直前に、恰も最後の試練かのやうに、思ひがけない大きな困難が、青木たちの前に起つたのであつた。

それは孤島ジャルマの生活が樂しく二年を經た夏のことであつた。彼等の生命の源である井戸の水が涸れ果てたのである。一滴の水も出なくなつた。

青木と知念は、みんなを勵まして、二尺ばかり掘りさげてみたが、その結果は、たゞ一同の者を、失望させるのみであつた。

水は、まつたく、涸れてしまつた。

はじめの間は、夜になるのを待つて、船でこつそりと、對岸へ渡つて、樽やバケツに水を汲んで來たのであつたが、それも毎日となると、仲々容易なことではなかつた。

不平を言ふ者は、一人もなかつたが、一同の顏には、うち消すことの出來ない、疲勞の色が見えて來た。

『これは、困つたことになつた。水が一滴も出ないとなつては、此まゝ、ジャルマにとゞまることはできない。これは愈々ジャルマを去れとの天のみちびきであるに違ひない。より好き島がきつと他にそなへられてあるに相違はなからう』

さう決心し、さう考へると、青木は、決然として起上つた。

『ジャルマを出る時が來たよ。俺たちはほかの島へ移るんだ。もつと水の出る、もつと青草の茂つた、そしてもつと住みよい島へ！』

斯う言つたとき、みんなの者は、あきれたやうな顏をして、青木をみつめた。

『水の出る島が、一體、何處にありますかな』

先づ、かう口を開いたのは、知念だつた。

『餘り照りつけるから水が出なくなつただけですよ。まア暫らくしんぼうしてみたらどうでせう。そのうちには、きつと又、出てくるんですよ』

知念は幾度もさう言つて、青木の興奮してる心を、なだめやうとした。

併し、青木は、頭を振つた。

『知念さん、ジャルマは私たちを今まで樂しく過させてくれた。これは神が、あの大迫害よりのがれさせて下さつた別天地であつたのです。しかし「つれ〴〵の」の御歌の下された今日、よもや大宜味のやうな迫害を受けることもなからうじやないか。埃及を出て、乳と蜜との流るゝ國を求めて、旅に出た昔の人たちのやうに、今は私たちが綠草と水とのある島を探す時だよ』

青木は諦すやうにかう言つて、默つて、また海の上に眼を走らせた。

『だつて、これから、何處へ行くんですかい』

一人の男が側から聞いた。

『雲の柱の立つてるところへさ』

青木は、これだけを言ふと、小手をかざして、周圍の海上を、眺めまはすのであつた。

幾人かの元氣な連中が、舟をあやつつて、あてどもなく出かけた後、後に殘つた二十餘名の者は、斷食祈禱をすることにした。

病者たちは、陽をさけて、芭蕉の葉蔭に車座に坐つた。そして水と綠草のある島が與へられるやうにと熱心に祈つた。

日は暮れた。そして、美しい星の夜がおとづれて來た。

『今夜は、徹夜の祈をしやう』

誰も命令する者とてはなかつたが、彼らはかう定めると、涼風の渡つてくる草の上に坐つて、またしても、祈りつづけるのであつた。

祈つては歌ひ、歌つては、祈つた。

星はよもすがら、此の祈禱の座の上で、さんらんと輝いてゐた。

けれ共、舟で出かけて行つた人たちは、翌日になつても歸つて來なかつた。

彼らには、だん〳〵と、飲料水が、少くなつて行つた。

對岸の大宜味部落に、水を汲みに行くには、何よりも大切な、舟がなかつたのである。

彼らは暑熱とたたかひ、咽喉の渴きと闘はねばならなかつた。

彼らが、青木たちの乘つてる舟を、海の上に見出したのは、恰度三日目の朝だつた。

『舟だ、舟だ、——舟がかへつて來たんだぞ！』

一人が斯う叫ぶと、みんな小高い岩の上にのぼつた。そして、手を振つたり、帽子を振つたりした。

舟の中からも、しきりに、合圖をした。

彼らは、岩の上からおりると、みんなで塊つて、渚に舟の着くのをむかへた。

『まア、よく歸つてくれたな』

『待つたよ』

『疲れたらう』

人々は、てんでに、斯うよばはりながら、舟から出て來る同志たちを取巻いた。

『ジャルマにまさる島がみつかつたぜ』

青木は舟から出ると、みんなに取まかれながら、はづんだ聲で、先づさう言つた。

『何處です、どこの島です』

『屋我地だ』

『えつ、屋我地ですつて？』

『さうだ、屋我地島だ。君たちは、運天港を知つてるだらう。今帰仁村の東北の端にある、あの海峽だ。あれを渡つたところにあるのが屋我地島だよ。いや、おどろいたネ。あそこには、とても綺麗な水が湧いてるよ。冷くて、おいしい水だ。ちよつとも濁つてゐない。それに、あたりは、青草が一杯だ。おまけに風を防ぐ岩が、附近には、まるで屏風のやうに立つてるじやないか。アダン林もつづいてるし、相思樹もあるし、琉球松も立つてるし、とても惠まれた地だよ』

『まア、それはよかつた、そして、その近邊には、健康者はゐないのかネ』

『十四、五町も行けば部落があるが、運天港の海峡を渡つたところには、全く人はゐないから、何も心配なことはないさ』

『そいつはよいところですな。では、これから、みんなで、ひつこしますな』

『さうだ、すぐに、準備をするんだ』

人々の心は、希望に、おどつた。沈んでゐた顔が、急に、元氣づいて來た。

二ケ年半住み慣れた土地を去ることは、寂しいことにはちがひないけれども、併し、眼の前にあらはれた此の大いなる希望は、みんなの心を喜びを以て滿した。

小さな舟であるから、一度に移轉することは出來なかつた。前後三回にわたつて、ジャルマから屋我地島へと運ばれることになつた。

此の新しい島は、病者たちに幸福な思ひを與へるに、充分であつた。

運天港は德川時代の末期に、イギリス、フランス、アメリカの軍艦が、通商貿易交渉のため、琉球訪問中に、屢々碇泊した所であつた。日清、日露兩役時代までは、我國軍艦の出入があり、ながい間、當時の石炭庫が殘存してゐた。永萬元年には、源爲朝が上陸した土地だとも言はれてゐる。慶長十四年、琉球征服の時、薩軍は、那覇港が防備嚴重なために引返して、運天から

上陸し、名護、恩納等を經て、首里へ攻め上つたと言ふ。

運天港の近くには舊蹟が少くない。

源爲朝上陸の記念碑のある所から、峯傳ひに東へ登ると、ウバシといふ一本松の立つた隆起珊瑚礁の高臺がある。そこに立つと、運天港が眼下に見おろされるばかりでなく、左に古宇利、伊平屋の二つの島、右に屋我地島を瞰下し、東方はるかに羽地、大宜味、國頭の連山を眺め、沖繩本島の最北端である邊戸岬の前方には、鹿兒島縣管内の、與論島が、渺茫として浮んでゐるのが見える。

更に、記念碑から下運天の部落に下りかける丘の中腹を、左手の山中に這入ると、百按司墓と稱ふる古墳がある。モモは百にて諸々の意、チャナはチャラの轉訛で古語按司の義だといふ。北山王族を葬つた所と傳へられる。

百按司墓より下りて、左手海岸近くに、斷崖を掘り拔いた宏壯な墓がある。これは尙眞王の三子今歸仁王子尙韶咸の子孫が、四百年前より百五十年間北山監守として在城してゐた一族を葬つた所である。

對岸の屋我地島に渡ると、そこには、弘化三年、東洋周遊中の佛國戰艦で病歿した、クレオ

バトラ、ビクトリエウス等二老將軍を祭つた、和蘭墓がある。

島の東方、小學校の近くには、ヒルギ林がつらなつてゐる。海中にマングローブが生育して滿潮の時は、樹間に小舟を遣ることが出來る。

『俺たちの立つてるところは、みな歴史の書かれた地だよ。海の中に立つてる巖と、渚の白砂とは、あり〳〵と、歴史のうつり變りを見たに相違ない。——かうした地に住むことのできることは、なんと有難いことではないか！』

青木はかう言つて、一同の者に、希望と勇氣とを與へた。

逞しき建設へ

病者たちは、數日の間、岩窟の下や、林の中に野宿をしながら、あちこちから材料を集めて來て、自分たちの住ゐをつくり初めた。

併し、かうした希望と喜びは、間もなく、恐怖を以て取換へられるやうになつた。それは、附近の部落民が、非常に激昂してゐるといふことが、何處からともなく、傳へられたからである。

屋我地島では、癩病は、とても嫌はれてゐるのである。

『癩は惡魔に憑れた結果だ』

斯うした觀念が、今なほ拔け切らないでゐるのが、屋我地島の住民であつた。

ジャルマから、癩病者の一團隊がやつて來たことは、直ちに、附近の部落民に知れわたつた。部落では、すぐに、集會が催された。

『俺たちの島に、あゝした不淨な奴らがやつてくることは、絶對に許されぬ。早速追つ拂ふことにしなければならぬ』

これが、部落民の、卽座に定めた、決議であつた。

『どうも、部落の空氣が、おだやかでないやうだ』

病者たちは、その特有の神經を以て、早くも、彼らの身邊に、形容し難い或もの——險惡な氣流が、急速度で迫りつゝある事を、敏感にさとつた。

『大宜味の二の舞がやつてくるに相違ない』

青木も、はつきりと、斯う直覺することが出來た。と同時に、癩者であるために人々からこ

の様に忌み嫌はれねばならぬ悲しみが深く胸に衝き上げて來た。——大宜味からジャルマへ、あゝあの孤島の生活は誰も咎める者もなく樂しかつた。しかしそこも水が無くなつて、かうして水を求め、新しい生活を求めてこの島に辿り着いた自分達ではなかつたか。最早こゝを追はれては行くべき處もない。この屋我地の島こそ天が我等に示して下さつた新しい住居の地ではなかつたのか。——青木の心は悲痛な想ひに沈むのであつたが、自分と共に來た病者たちの不安の面持を見た瞬間、青木はこゝにこの癩者たち一團の生活を守らなければならぬとの、強い責任感を覺ゆるのであつた。生きるための智慧、運命の好轉を青木は願はずにはゐられなかつた。かうして、彼は決意を眉宇にみなぎらせ乍ら皆をあつめて語つた。

青木の樹てた善處策はこれであつた。

(一)部落民はきつと、こゝに殺氣を含んで、押寄せてくるにちがひない。(二)そして、即刻退散しろと要求するに相違ない。(三)その時には、こちらでは、何等正面から云はぬことにしよう。(四)併し、默つてゐてはいけないから、みんなで聲を揃へて讃美歌をうたひながら、小屋作りをすることにしよう。(五)若し小屋を破壞しても、一言も爭がましいことを言はないで、矢つ張り歌つてることにしよう。なぐられても歌つてゐよう。全然抵抗しないことにしよう。

(六)そしたら必度、代表者を出せと言ふにちがひない。その時には、あの新城(あらぐすく)を出さう。新城は、咽喉がやられて、殆んど聲の聞きとれない上に、いつとう落ついてゐる。(七)かうしてゐるうちには、必ず、神の手が、動き出すに相違ない。そして部落民が押寄せて來たら、俺は附近のアダン林に、身をひそめてゐることにする——。

青木が、みんなに此の計畫を語ると、一同は異口同音に、それは妙案だと言つた。

『大丈夫だ、青木さん。萬事は私にまかせなさいよ』

新城は、皆の氣を引き立てるやうに、わざと大げさに、胸をぽんと打つてみせた。

はたして、青木の豫想したとほりのことになつた。

部落民が押寄せて來たのは、かうした相談をして、一時間とは經たない後であつた。がやがやがやと、やかましく罵り騒ぎながら、手(てん)手に、鍬やら、棍棒やら、丸太やらを持つた部落民は、病者たちの周圍を取圍んでしまつた。

そのとき病者達は、聲を揃へて讃美歌を歌ひながら、せつせと小屋がけをするのであつた。

歌は朗らかであつた。

調子は少しも亂れてゐなかつた。

病者たちは、自分たちの周圍をながめようともしなかつた。歌ふことと、仕事をすることに、まつたく、餘念なしといふ有樣であつた。

『おい、だまらんか』

部落民は大きな聲でどなつた。

『こら、おれ達の言ふことが、聞えぬか』

かうした聲も飛んだ。

『貴樣らはつんぼか』

かう言つて、どなりつける者もあつた。

併し、病者たちは、まつたく、さうしたことに無關心そのもののやうであつた。

彼らは、ひたすらに歌ひ、ひたすらに仕事をつゞけた。

群集は騷ぎ出した。足ずりした。どなつた。手を振つたり地の上を叩いたり、わけの分らぬことを、てんでに、どなつたりした。併し病者たちは、相變らず朗らかにうたひつゝ仕事をつゞけた。

小屋がけは、どん〳〵、進行して行くのであつた。

たうとうたまりかねた群集は、顔役のやうな男が、大きな聲でどなつた。

『おいお前たちの中から、代表者を一人出してくれんか。相談があるんだから。そんなに歌ばつかり歌つてゐないで、少しは、こつちの言ふことにも耳を借すもんだ』

『なに、代表者ですつて?』

始めて新城がさう答へたが、その聲は、咽喉の奥で、ささやくやうにしか、群集には思はれなかつた。

『もつと、大きな聲で言つてくれ、お前の言ふことは、さつぱり聞えぬではないか』

その男は又かうどなつた。

『私は一生懸命ですよ』

新城はおちついてゆつくりとかう答へた。

『聞えぬ、聞えぬ』

殺氣立つた群集はたまりかねて叫んだ。

『だが、私は、こんなに精出して、聲を出してるんですが……』

新城はいよ〳〵おちつくばかりであつた。

『おい、もつと、はつきりと返事をしねェか』

群集は罵り騒いで、わあッと、新城の前に押よせて來た。

新城は、靜かに、そこに突立つてゐた。

わあッと押寄せて來た群集は、しかし、すぐに、

『こいつは、たまらぬ』

と無遠慮に、口々に罵り騒ぎ乍ら、二三歩後に引きかへした。新城の體から發する、その臭氣に堪へなかつたのである。

『わたしは、一生懸命に、話してるんじやありませんか』

新城は、さう云ふと、二足三足、前方に歩き出した。

すると群集は、顏をしかめて逆に二三歩後に退いた。

『そんなに逃げなくてもいゝでせう。わたしは、あなた方にお答へしてるのでは、ありませんか』

新城は、今度は、思ひ切つて、うんと、群集に接近して行つた。新城の體が動く毎に、惡臭はあたりに發散するのであつた。

『やい、此の野郎！』

群集の一人が、鍬を頭の上に、振りあげた。

すると、かたはらに立つてゐた男が、あわてゝ引取めた。

『無茶するんじやないぞ。相手は、あれじやないか。クンチャンじやないか』

沖縄では、癩病をクンチャンと云つた。そして、クンチャンに手を出すと、必ず詛はれるといふ考が、特に、此の屋我地島では、強かつたのである。

『ううん』

鍬を振りあげた男は、呻き聲を出すと、急に鍬をおろした。

病者たちは、かうしたことには關係なく、歌をうたひつゝ、手を休めやうともしないで働らいてゐた。

アダン林の中から、かうした光景をうかがひながら、青木は、彼の計畫が成功しさうなのをよろこんだ。そして、心の中で、

『新城、しつかりやつてくれ』

と、幾度もく叫ぶのであつた。

その時、アダン林の傍に小便をしに來た群集の一人が、藪の中に、人のけはひを感じたらしかつた

『おうい、アダン藪の中に、どいつか、かくれてゐやがるぞ』

と叫んだ。

『青木だ、青木だ、――青木の奴にちがひない』

人々は、斯う叫ぶと、棍棒や丸太を持つた血氣な青年たちが、まるで獲物を見つけた獵犬のやうに、ときの聲を擧げながら、青木のかくれてるアダン藪を目がけて、突擊をした。

けれども青年たちは、大藪の一歩手前まで行つたとき、思はず、

『わあッ』

と、ものすごい悲鳴に似た聲をあげると、青蠅がいちじに飛び立つやうに、ぱつと、散つてしまつた。

アダン藪の手前の、古い相思樹の幹に、ぐる〳〵と巻ついてゐる、大きなハブを見つけたからである。

『ハブだ、ハブだ』

人々は、まるで、氣が狂つたやうに、どなり合つた。

『ハブだ』

此の聲を聞くと、誰も彼もすつかり顏色を變へた。

病者たちも、思はず、ぞつとした。

併し、彼らは、それでも、歌ふことと、手を動かすことを、やめやうとはしなかつた。

群集の間には、此時言ひやうのない、一種の恐怖がおこつた。

彼らは云はず語らずの間に、

『うつかりクンチャンに、手荒なことは出來ないぞ』

と、感じたのであつた。

そして、誰がいひ出すともなく、今日はこれで引上げやうといふことになつた。

『やい、みんなの奴らに云つとくぞ。俺らは今日はこれで引上げてやるんだが、決してお前達を見のがしにするんじやないぞ。痛い目に逢はぬうちに、どこかに、消え失せることだ』

はじめに口を利いた、顏役みたいな男が、斯う毒々しくどなると、群集はまた口々に罵り騷ぎながら、草原の向ふへどや〳〵と立去つてしまつた。

群集の立去つたあとには、相變らず、讃美歌の聲が、夏の蒼穹にたゞやうて行くのであつた。

古い相思樹の幹に、ぐるぐると卷ついてゐた大ハブは、病者たちが一齊に見てゐる前で、ずる〳〵と幹から降りてくると、細い草徑を傳ふて、海岸の岩の方へ、ゆる〳〵と逼つて行つた。

ハブと見たら、どんな小さなのでも、殺さねばやまなかつた病者たちであつたが、今は誰一人、殺さうといふ者もなく、默々として、岩の方へと逼つて行く、青光りのする大ハブを、眺めてゐるのみであつた。

『ハブが、青木さんを守つてくれたんだ』

病者たちは、ハブのかくれて行つた海岸の大きな岩を眺めながら、互ひにささやくやうに言ひ交すのであつた。

『何もかも、大きな惠といはなければならない——』

藪の中から出て來き青木も、如何にも、感慨深さうだつた。

『これで、まあ〳〵、危機は一先づ去つたやうなものだ。——あとは、小屋の中にとぢこもつて、持久戰をするばかりだ』

皆んなは又聲をそろへて朗らかに歌ひ出した。小屋はその日のうちに、まつたく出來あがつてしまつた。

屋我地島に、病者たちの新しい住ゐが定まつてから、間もなくのことだつた。

那覇の基督教會堂では、一つの協議會が開かれてゐた。それは服山牧師を中心とした、救癩協會に關係を持つてる人々の會合であつた。

協議の主題となつてることは、三井報恩會より貰つた九千五百圓の金を、如何に用ふべきかと云ふことであつたが、一同の意志は、これに尙不足の分は募金して、癩者を收容する、小ぢんまりとした、病舍を建てやうと云ふことに一決した。

場所は、今度ジャルマから青木たちが移つて行つた、屋我地が一番適當であらうといふことになつた。

中央に置かれた机の上には、すぐに、設計圖が引かれた。

本館は治療室、病舍、講堂、客間として、總建坪百十四坪、職員舍十八坪、——費用は、どうしても一萬百六十八圓ばかりを要することに計算された。そして少くとも、四十人ぐらゐは、收容される見當だつた。

『一萬圓――結構ではないか、三井報恩會の九千五百圓の外にまア千圓もこさへたら、立派なものが出來るではないか。やらうではないか！』

服山牧師の眼はかがやいた。

『よし、はじめやう！』

誰一人として、異存を申立てる者はなかつた。

彼らの眼には、藍色の海に取まかれた、屋我地島の美しい姿があらはれて來た。そこに建てられる收容所の建物が浮んで來た。

『では先づ、誰か二三人で早速屋我地へ出かけて、實地踏査をすることにしよう』

『それから募金運動！』

『それから看護婦が二三人……』

『それから、飯炊の女――年老つた、そして信仰のあつい！』

『それからお醫者さん――』

人々はかう語りながら、如何にも嬉しさうに、大きな聲で笑ふのであつた。

同じ日那覇に催された沖繩縣町村長會では、國立癩療養所を建設するやうにと、沖繩縣知事、大藏大臣、內務大臣の三人に、陳情書が提出された。

その理由としては、次の如きことが、書かれてあつた。

『沖繩縣の癩患者數は全國第一位なり。沖繩縣は昭和十年三月末縣衞生課の調査にては、一千名の統計なれども、沖繩縣には離島多き關係上、正確なる統計表を作製する事は甚だ困難なり。且つ本島の癩は、猖獗を極めつゝあり。現在では、二千餘名を推定し得るに至れり。沖繩縣の人口を假に六十萬とするも、三百人に對し一人强の割となるなり。

又一例を擧げんに、癩多き名護町の如きは、昭和七年の調査にては、人口一萬三千に對し、五十七名といふ警察の調査なれども、現在では百五十名を算し得るなり。日本內地の人口一萬に對し、癩患者二人强であるのに、これは百名に對し一人强となり、驚くべき比率を示せり。

今や癩患千を超ゆるものにして、療養所を持たざるは沖繩縣のみとなれり。實に沖繩縣は、最大癩密度、最大癩者數の縣なり』

又、沖繩縣の癩患者は、ますます增加の傾向があるとて、かうしたことも書いてあつた。

『前記の如く沖繩は、最大癩患者、最大癩密度の縣なるに加へて、急激に增加しつゝあるの兆候著しきものあり。試みに之を最も正確なる徵兵檢査の統計に徵して見るに、日本は、明治三十年頃、一萬の壯丁者に約二十人の病者を見たるに、現在では一人半となり、漸減的にして、日本の癩者は減少しつゝある良き證左を示すに至れるに反し、沖繩縣は寧ろ增加の率を示しつゝあり。

卽ち昭和三年には、全國壯丁者中百二十八人の癩患者有り、其の中五名のみが沖繩縣人なり。而も昭和五年の如きは、全國癩患者百三名の中、沖繩の癩患者は二十九名にして、驚くべき高率を示せり。

此の統計を以て推すも、縣下全體に互つて、癩患は猛烈に傳染しつゝある事、極めて明なり。今にして何等の對策も講ぜず、現狀の儘に放棄せんか、沖繩縣は、癩を以て亡ぶといふも過言に非らず。云々』

町村長會の此の陳情書は、多くの新聞や雜誌に揭載され、遂に沖繩縣會の大問題となり、昭和十一年までに、國立癩療養所の設立を見ることを決議せしめたのであつた。

或る日青木は、德田からの、手紙を受取つた。それは熊本回春病院を去つて最近大隅半島の大姶良村に新設された、星塚敬愛園に、數人の病友と共に入園したことの報知でもあつたが、それは又かねて相思の間柄にあつた、同じ病者である、或る女との結婚の報知でもあつた。

『數年來、回春病院の律法に從つて、たゞ心と心とで睦み合つてゐた私たちは、今回思ひ切つて斷種の手術を受け、合法的に結婚しました。沖繩に渡つて、あなたと共に働かうと數年來考へてゐた私は、遂に、此の新しい療養所で、家庭を作ることになつてしまつたのです』といふことが書いてあつた。

青木は、德田の手紙を讀みながら、『どうか樂しい暮しをしてくれるやうに』と願ふ心の蔭に、何かしら、いひ知れぬ一抹の寂しさが、淡墨のやうに滲み出て來るのを、どうしても打消すことが出來なかつた。

――彼は、自分のことを、考へてゐたのだつた。思ふともなしに思ひ出されるのは、なくなつた正子のことであつた。なつかしい數々の記憶が、たまらない鄕愁を、彼の胸にそゝるのであつた。

『――併し、俺の潔癖性は、たうとうあの女に、考へてることさへ、打明けさせなかつた。

そのために、俺はどんなに苦しんだらう！　四國の遍路に出たのも、そのためではなかつたか。

俺は、あの女に、指一本觸れなかつた。そして、女はたうとう、死んでしまつたのだ。俺はあの女を、肉體で得ることは出來なかつたが、併し、正子はいつでも、高いところから――高い高い天から、俺を視てゐるやうな感じがする。……』

彼はさくさくと、渚づたひに、何處までも歩いて行つた。

海は靜かだつた。

沖には白い鷗が飛んでゐた。

『德田は德田、俺は俺だ！』

やがて沈痛な調子で斯う獨ごつと、唇をきゆつと嚙みしめて、遠く海の彼方に眷を放つた。

『俺の妻は沖繩だ！　三千人の同病者が悉く幸福になるまでは、俺は獨りで、此の一筋の道を歩いて行くばかりだ！　ああ「御歌」はもはや下賜されたではないか！　やがて無癩沖繩――否、無癩日本が、現はれてくるのも遠くはあるまい！』

――青木は昂然として頭を擧げた。

そして渚の砂を、一歩一歩確く踏みしめながら、病友たちの居る方へと歩いて行つた。

それから一年の後に、その地に、三井報恩會の援助によりて、新しい家屋が建築され、更に引つづいて、國立癩療養所がそこに建設せられることも豫想してはゐなかつたが、併し、その眼は、或る確信に燃えてゐた。眼には見えないが、大いなる手が徐々と、しかし確實に、彼らの周圍に――沖繩全島の癩者の間に、すでに働らき始めて居ることが分つて居た。

彼は、新しい明日が、今日の混沌の中から生れることを、はつきりと意識してゐた。

――青木は昂然と頭を擧げて歩いた。

――終――

卷末に

沖縄救癩運動のために、みづからの生涯を獻げ盡して、遂に國立癩療養所建設の礎石となつた一人の癩病患者の姿を、小説化したのが此の物語である。

大東亞三百萬の癩者に、新しく呼びかける責任を負はされてゐる我等は、此物語の主人公の胸に燃えたものを、今日我ら自らの魂の中に、點火せしめねばならないだらう。

無癩日本、無癩東洋のまぼろしへ精進することが、これまた八紘一宇の大理想の一翼であり、科學日本の理想である限り、私は、此の物語の主人公を動かした精神を、我らも亦、新しく把握しなければならぬと思ふ。

皇紀二千六百〇三年初夏

武藏野の假寓にて

三浦清一

愛の村

(認承會版出 い250265號)

(檢)定 價 1.70
特別行爲稅相當額 .13
合 計 1.83

昭和十八年十月廿五日印刷
昭和十八年十月廿一日發行 三千部

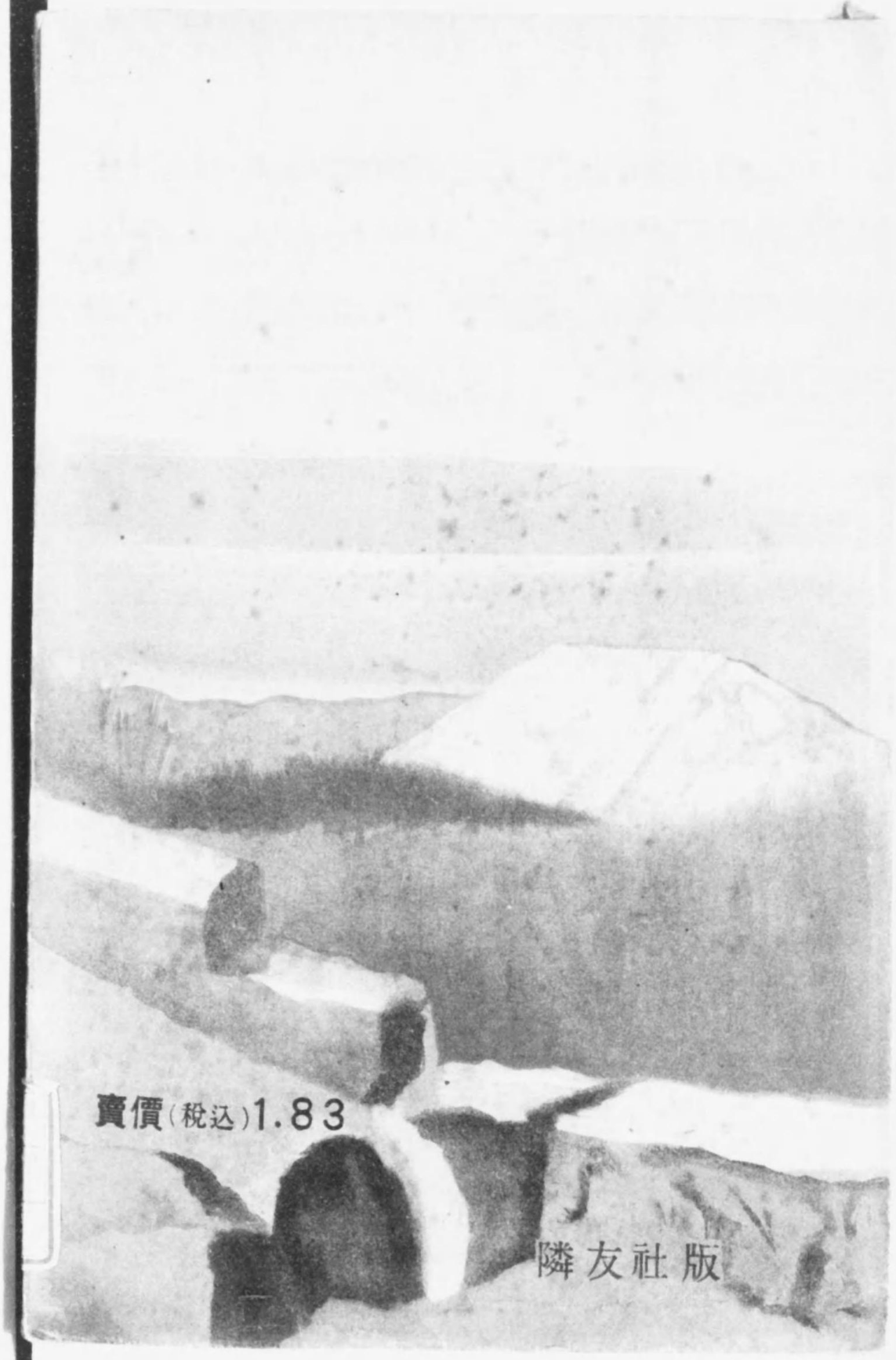
著者 三浦清一

發行者 東京都本郷區湯島二ノ五 脇屋とき

印刷者 東京都豐島區巢鴨五ノ一〇七二 吉田重五 (東東一八三四番)

發行所 東京都本郷區湯島二ノ五ノ七 會員番號一四〇〇一一 郷友社 振替東京一六九四八六 電話小石川八七〇

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

994
69

終